

館林市内遺跡発掘調査報告書

— 平成13年度各種開発に伴う埋蔵文化財調査 —

八方遺跡 (平13地点)

花山東遺跡 (平13地点)

宮内遺跡 (平13地点)

館林市教育委員会

館林市内遺跡発掘調査報告書

— 平成 13 年度各種開発に伴う埋蔵文化財調査 —

八方遺跡（平 13 地点）

花山東遺跡（平 13 地点）

宮内遺跡（平 13 地点）

館 林 市 教 育 委 員 会

例 言

1. 本書は、平成 13 年度に国宝重要文化財等保存整備事業・群馬県文化財保存事業の補助金を受けて実施した館林市内の遺跡発掘調査の結果をまとめたものである。
2. 本調査において報告する遺跡名は「遺跡台帳」に基づき次のとおりである。地点名は、平成 13 年度調査であることから、「平成 13 年度調査地点」とする。

八 方 遺 跡 (はちがたいせき)

花 山 東 遺 跡 (はなやまひがしいせき)

宮 内 遺 跡 (みやうちいせき)

3. 発掘調査及び資料整理は、館林市教育委員会が主体となり実施したもので、調査組織は次のとおりである。

教 育 長 大塚 文男

教 育 次 長 早川 勝敏

主 管 課 文化振興課

文化振興課長 今井 敏

文化財係長 阿部 博

学 芸 員 岡屋 英治(副担当) 阿部 弥生 原 幸恵

主 任 高橋 一哲(担 当)

主 事 補 釜島 美貴 打木 洋輔

4. 発掘調査参加者については、次のとおりである。

石井 悦雄 坂田 岩吉 高瀬 広 小林 俊彦 大澤平八郎 鈴木 正勝

小林 浩子 川島 範子 矢島 祐樹 大野 郁 田中 祐介 伊藤 浩彦

5. 調査による出土遺物、調査記録及び資料は、館林市教育委員会で保管している。
6. 発掘調査及び資料整理、本書の編集・執筆については、岡屋、高橋が中心となり行った。
7. 調査の実施から本書の刊行にあたり、下記の諸氏、諸機関のご協力をいただいた。ここに記して感謝申しあげる次第である。(順不同、敬称略)

岡田 勇 中里 利男 遠藤 チヨ 遠藤 常三 橋本 兼雄 西条 篤

毛塚 栄

館林市土地開発公社 館林市花山土地区画整理組合 谷田川北部土地改良区

〈目 次〉

例 言

目 次

図版目次

写真目次

第 1 章 館 林 市 の 環 境	1
1 地理的環境	1
2 歴史的環境	3
第 2 章 各遺跡の概要	5
1 八方遺跡	5
2 花山東遺跡	10
3 宮内遺跡	15

参 考 文 献

抄 録

〈 図 版 目 次 〉

第1図	館林市の位置	1
第2図	調査遺跡	2
第3図	館林市内の遺跡分布図	4
第4図	八方遺跡 周辺の遺跡	6
第5図	八方遺跡 トレンチ配置図	8
第6図	八方遺跡 出土遺物実測図	9
第7図	花山東遺跡 周辺の遺跡	10
第8図	花山東遺跡 トレンチ配置図	12
第9図	花山東遺跡 1 トレンチ平面図	13
第10図	花山東遺跡 出土遺物実測図	14
第11図	宮内遺跡 周辺の遺跡	15
第12図	宮内遺跡 調査区域図	16
第13図	宮内遺跡 トレンチ配置図	18
第14図	宮内遺跡 1・5・6 トレンチ平面図	19
第15図	宮内遺跡 出土遺物実測図 (1)	20
第16図	宮内遺跡 出土遺物実測図 (2)	21

〈 写 真 目 次 〉

写真 1	八方遺跡 調査前景観	5
写真 2	八方遺跡 調査風景	7
写真 3	八方遺跡 完掘状態	7
写真 4	八方遺跡 出土遺物	8
写真 5	花山東遺跡 調査前景観	11
写真 6	花山東遺跡 調査風景 (1)	11
写真 7	花山東遺跡 調査風景 (2)	11
写真 8	花山東遺跡 完掘状態	13
写真 9	花山東遺跡 遺構確認状況	13
写真 10	花山東遺跡 出土遺物	14
写真 11	宮内遺跡 調査前景観	16
写真 12	宮内遺跡 調査風景	17
写真 13	宮内遺跡 完掘状態	17
写真 14	宮内遺跡 埋め戻し風景	17
写真 15	宮内遺跡 出土遺物	20

第1章 館林市の環境

1 地理的環境

館林市は群馬県の南東部に位置し、市役所の所在地（城町）で、東経 139 度 32 分 44 秒、北緯 36 度 14 分 30 秒である。

市域は、東西約 15.5km、南北約 8.0 km と東西に長く、北は一部を除き渡良瀬川を隔てて栃木県に、東は邑楽郡板倉町、南は谷田川を隔てて邑楽郡明和町にそれぞれ接する。明和町の南には利根川が東流し、県境となっている。県庁所在地である前橋市までは約 50km、首都東京（台東区浅草）へは約 65km の距離にある。

地形的には、関東平野の北西部にあたる。現在の標高は 15m 台（大島町東部）から 32m 台（高根町）で起伏は少ないが、関東ロームに覆われた低台地と周辺の沖積低地に大別される。

低台地は、太田市高林から市中央部を東西に延び板倉町にまで続く洪積台地で、邑楽・館林台地と呼ばれている。市域の台地西側は、大泉町古海から館林市高根町に至る幅約 500m の低地帯により分断されている。この低地帯は、利根川の旧河道と考えられており、現況は逆川を含む水田地帯となっている。逆川を含む低地帯の右岸台地の縁には、幅約 200m 前後、比高差 5m の高まりが連続的に続いている。利根川旧河道に沿って帯状に所在することから、成因は河畔砂丘と考えられており、ローム層に覆われることから埋没河畔砂丘とも呼ばれている。

この高まりの館林市域分は、多々良沼の南東方の景観に代表されるアカマツを中心とする雑木林となっており、鞍掛山脈や毛氈山の地名がある。

台地の周囲には、利根・渡良瀬川に連なる大小河川の氾濫原である低地が広がり、現況は水田地帯になっている。土地改変の進んだ現在は平坦化が進んでいるが、古い空中写真などの資料から、低地帯中には微高地や旧河道の窪地が観察できる。

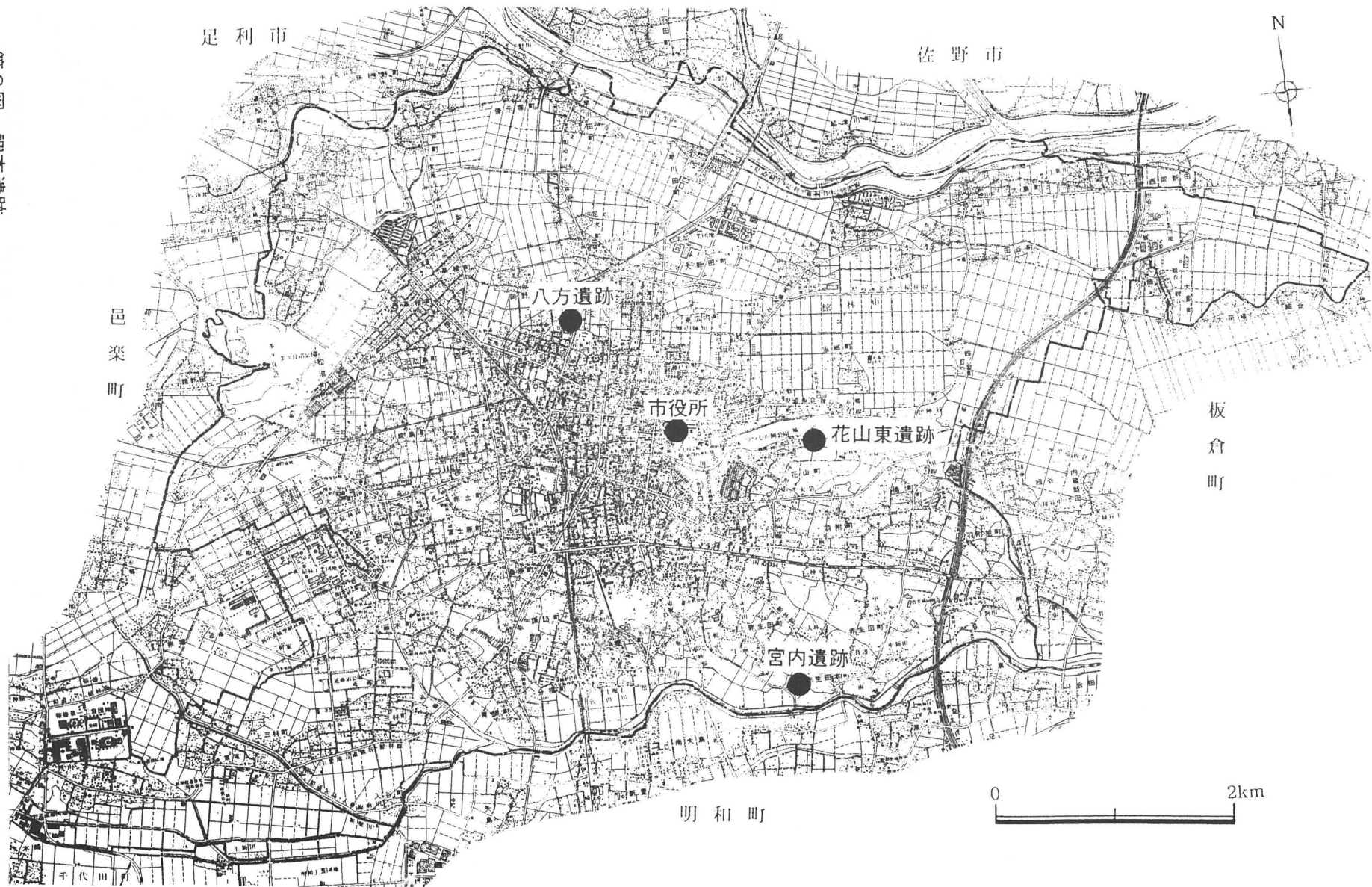
微高地は中・近世に成立した集落の居住域となっている場所もあり、地形的に自然堤防と考えられているが、近年関東平野各地の沖積地内で遺跡が発見されており、ローム層が埋没している可能性もある。

館林の市街地北西の県道（寺岡・館林線）沿の高まりは、建設省国土地理院発行の「土地条件図・古河」では自然堤防と表記されていたが、発掘調査の結果下部にローム層が存在していることが判明した。低台地の縁辺部は低地から延びる谷（雨水の集水域）が樹枝状に開析し、茂林寺沼をはじめ大小の沼や湿地帯が形成され、その景観は、本市の特徴の一つになっている。



第1図 館林市の位置

第2図 調査遺跡



2 歴史的環境

館林市内に所在する遺跡は、144ヶ所あり、昭和63年刊行の『館林市の遺跡』（市内遺跡詳細分布調査報告書）に詳細が報告されている。

これによると、本市の台地上には旧石器時代から現代まで連続として、人間の生活の痕が残されている。分布調査による採集遺物から大別した、各時代の遺跡数は次のとおりである。

旧石器時代の遺跡3遺跡、縄文時代の遺跡13遺跡（縄文土器のみ採取できた遺跡）、弥生時代の遺跡はなし（弥生時代の遺物を採取できた遺跡1遺跡）、古墳時代～平安時代の遺跡（土師器の出土した遺跡）96遺跡（うち縄文時代の遺物も採取できる遺跡は23遺跡）、古墳は17遺跡（古墳総数25基）、中世生産址1遺跡、中世城館址12遺跡、近世城館址2遺跡である。（ただし、複合した時代の遺物散布が見られるため、その中心となると考えられる時代でまとめたものである。）

これらの遺跡の分布は、地形的な特徴と大きく関わっていることが観察される。

次に時代的変遷と地形的な関わりを概略してみると、次のようになる。

旧石器時代

この時代の遺跡は、市内の標高の高い地域に集中する傾向を見せる。邑楽・館林台地の北西に沿ってある鞍掛山脈と地元で呼ばれる内陸河畔砂丘（自然堤防）上にその多くが確認されている。

縄文時代

この時代になると、遺跡数が増えるとともに洪積台地上に営まれるようになる。前期や中期の遺跡は、池沼や谷地を望む舌状台地上の平坦面に確認されることが多い。後期以降は遺跡数の減少が見られ、その所在は、台地の斜面から微高地に移る傾向を見せ、後・晩期の包含層等は低地（沖積地）におよぶ。

弥生時代

弥生時代の遺跡として確認されたものは無いが、微高地や台地の斜面等で、遺物等がわずかに確認されている。

古墳時代

前期の遺跡は少ない。遺跡は、洪積台地の斜面からテラス状の微高地に所在することが多く、この傾向は、弥生時代の遺物散布に似ている。

中期には、遺跡の数が増えるとともに、その所在は、台地の斜面から台地上の平坦面へと移行する。

後期には遺跡数の増大が見られ、台地上の平坦部に所在するが多い。

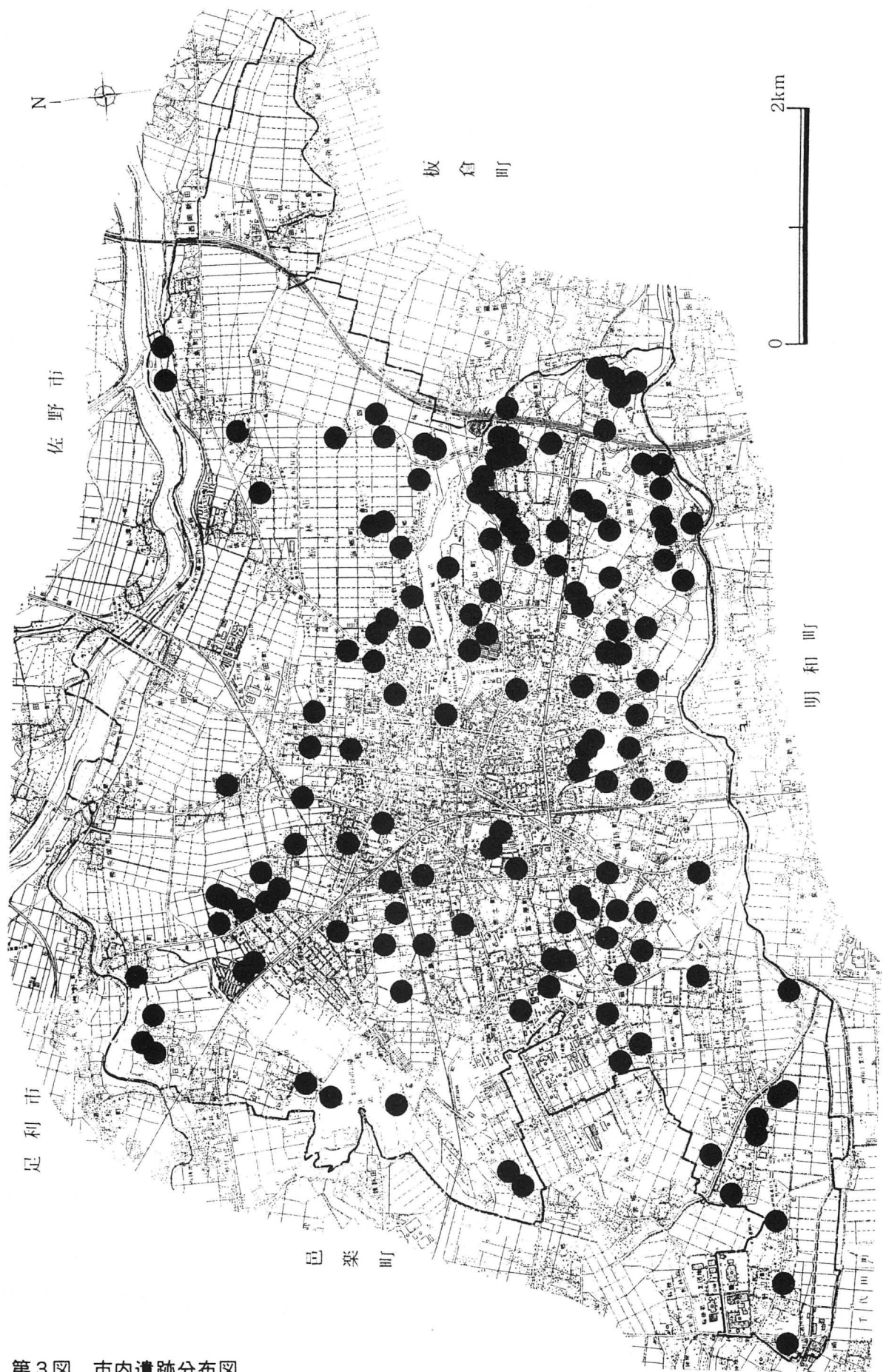
墳墓としての古墳は、25基が残存している。古墳群が2ヶ所あり、一つは日向地区を中心とする邑楽・館林台地上、もう一つは高根地区を中心とする内陸河畔砂丘上にある。その他単独のものも多いが、そのいずれもが、谷や谷地等を見下ろす洪積台地上に所在している。

奈良・平安時代

この時代の遺跡は急増する。台地の内部や前面で遺物の採取ができることから、この時代以降は台地上には普遍的に集落等が営まれてきたことを示唆している。

中世・近世

この時代の城館址については、伝説的な要素が多く実体ははっきりしないが、中世末には館林城が築かれ、現在の館林市の基礎となった。



第3図 市内遺跡分布図

第2章 各遺跡の概要

1 八方遺跡

【立地と環境】

八方遺跡は、館林市の北部、東武鉄道佐野線「渡瀬」駅の西方約0.5kmに位置し、渡良瀬川の洪積台地に突出する舌状台地上に所在する古墳時代から平安時代にかけての遺跡である。

これまでの数回の発掘調査で、古墳時代の住居址や大型の有段遺構等が検出されていることから、古墳時代を中心とした集落跡であることがわかっている。

本遺跡は邑楽・館林台地の北部に位置する遺跡で、周辺の地形を見てみると、本遺跡の載る台地は、市街地中央の邑楽・館林台地からきたの渡良瀬川沖積地に半島状に延びており、幅約150mの馬背状の舌状台地で、台地の西と東は渡良瀬川が形成したと考えられる沖積地に囲まれており、沖積地との比高差は約2mである。

本遺跡の西側には沖積地を隔て、邑楽・館林台地の本体及び内陸河畔砂丘とよばれる自然堤防が見られ、東側には、旧河道に沿う自然堤防が見られる。

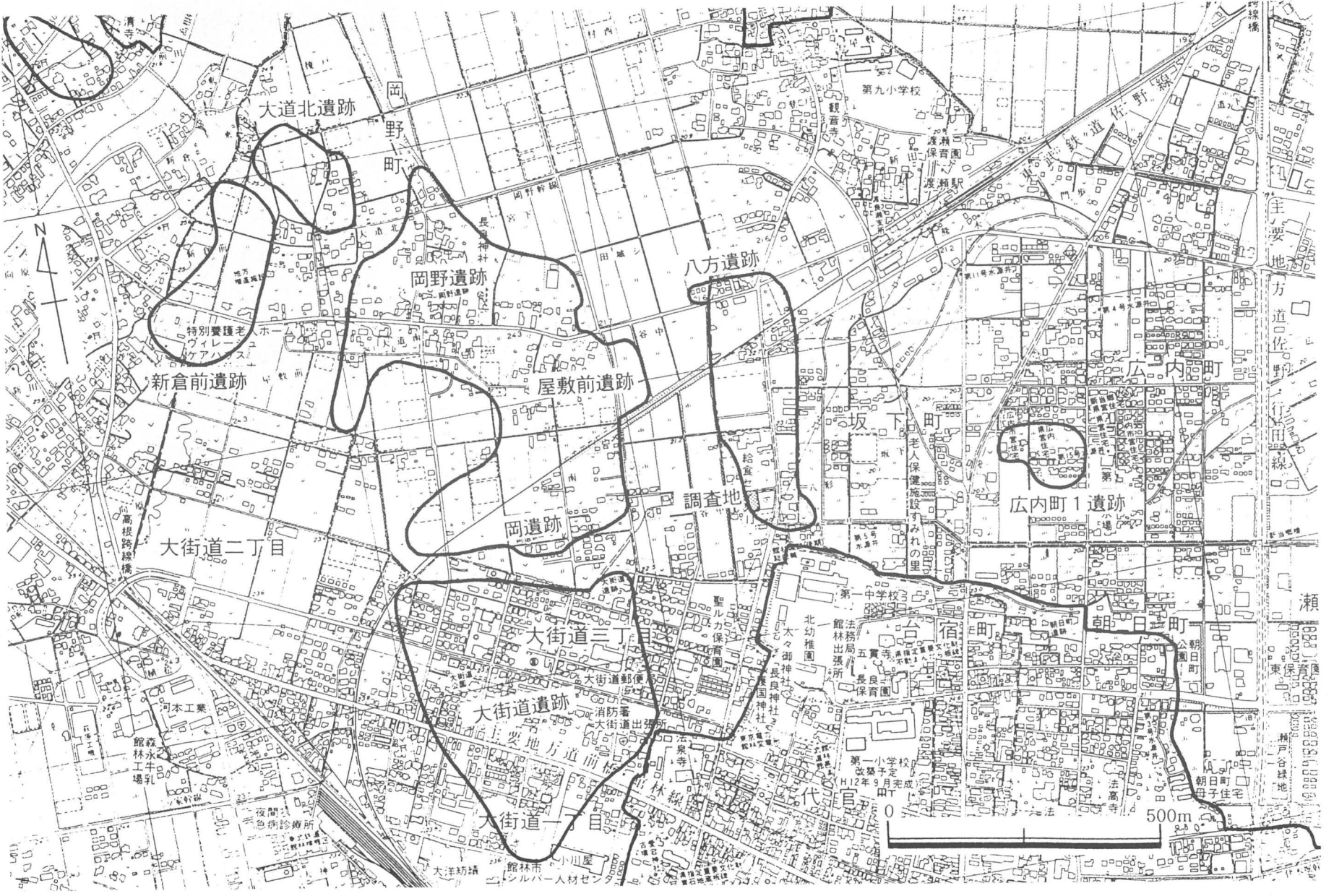
本遺跡で確認された住居址や大型有段遺構等の主要なものは、舌状台地の中央部から斜面にかけて構築されており、本遺跡の中心部は舌状台地の中心部にあるものと考えられている。

次に、周辺の遺跡をあげると、『館林市の遺跡』（昭和63年）作成に伴う遺跡分布調査において、渡良瀬川の大きな沖積地を挟んで西側の台地上に縄文時代の住居址が確認されたほか、古墳～平安の土器片が多く散布する岡野・屋敷前・岡遺跡がある。

また、南側の邑楽・館林台地北斜面に、縄文時代や平安時代の遺物が確認された大街道遺跡、東に縄文時代の遺物を散布する朝日町遺跡、南に古墳時代の墳墓である愛宕神社古墳が所在し、台地全体には近世の城跡である館林城跡・城下町が広がっている。さらに、北及び東側の渡良瀬川の沖積地中には、旧河道が蛇行して確認されており、これに沿ってある微高地に平安時代の遺物が散布する広内町1遺跡、広内町2遺跡や中世城館址である蛇屋敷跡が所在している。



写真1 調査前景観



第4図 周辺の遺跡

【調査の概要】

本地点の発掘調査は、岡野町字八方 16-2、17-2 における都市計画道路「青柳広内線」築造工事に伴う事前調査として実施した。

調査地の現地形は、東から西へ向かい傾斜しており、高低差は 30cm 程度であった。

本地点は、平成 11 年度地点の南側に位置しており、前回の調査では東側でローム層の確認が出来たものの西側では確認が出来なかった。また、少量の遺物を確認したが、遺構等は確認されていない。

こうしたことを踏まえ、計画道路上の東西方向に 3 本のトレンチを設定し、地下の状況確認を行った。

調査地の旧地形は、トレンチ東側で表土下 90cm でローム層を確認できたが、西側では、ローム層の確認ができなかったことから、平成 11 年度調査地同様、西側に向けてかなり傾斜している状況が確認された。

また、トレンチ西側では、常時地下水が湧き出てくる状態であった。

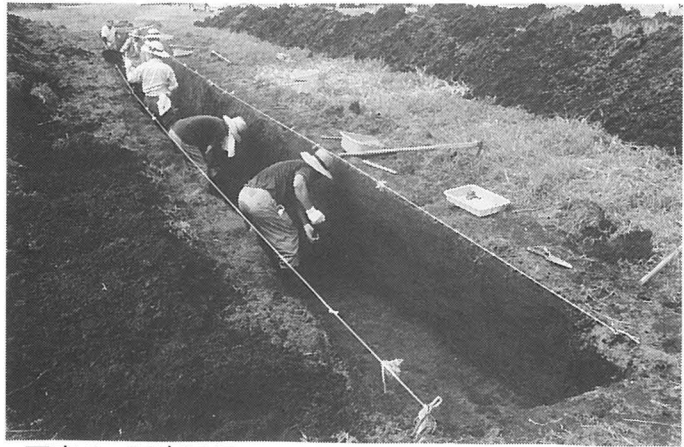


写真 2 調査風景

1 トレンチでは、東側で表土下 90cm でローム層を確認できたが、西側は確認できなかった。

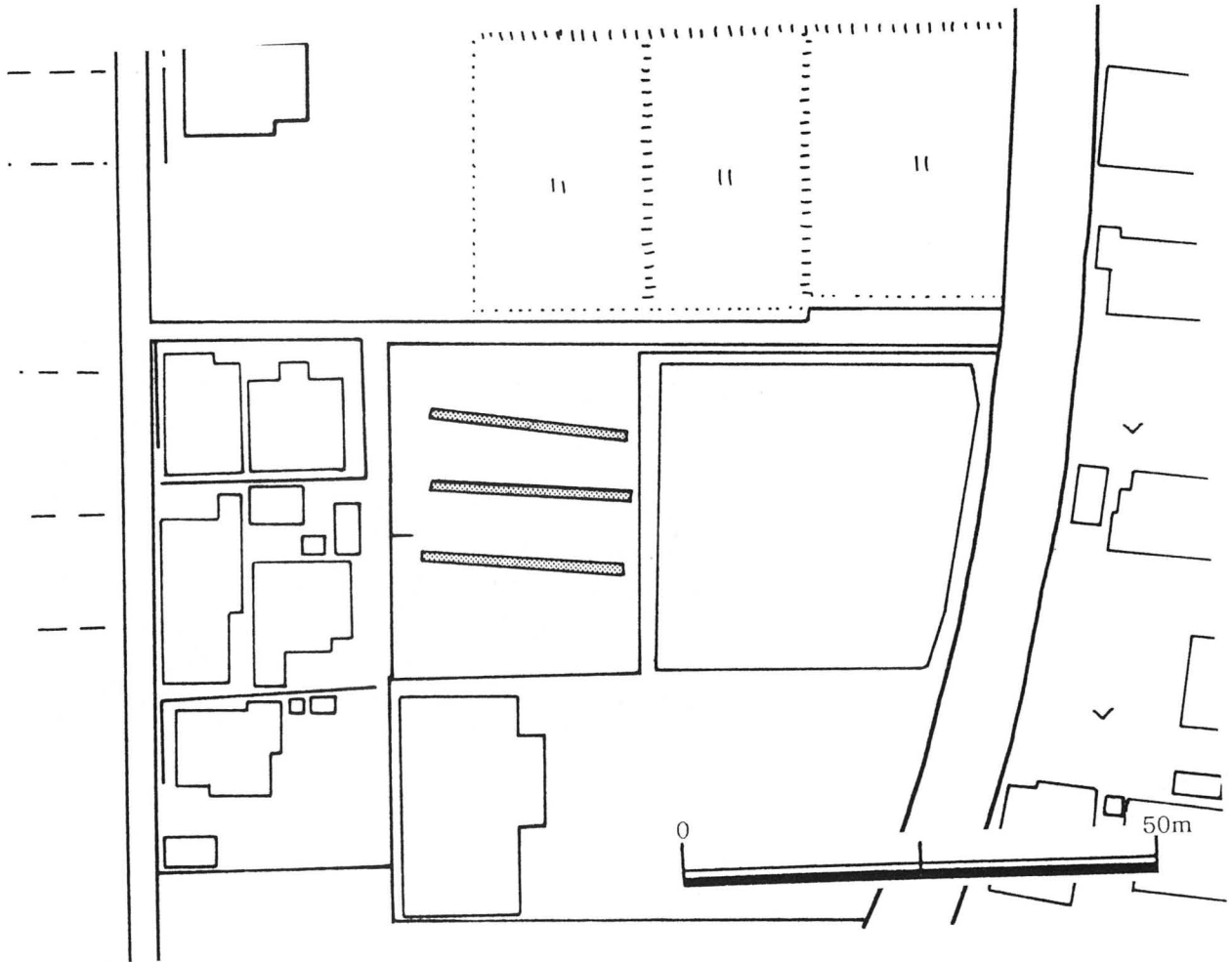
2 トレンチでは、東側で表土下 1 m で確認できたが、西側は 1 トレンチ同様確認できなかった。

3 トレンチでは、東側の表土下 80cm でローム層をトレンチ中央部まで確認できたが、1・2 トレンチ同様西側では確認できなかった。

本調査では、各トレンチから少量の遺物を確認できたものの、遺構等の確認はできなかったことから、計画されている都市計画道路「青柳広内線」築造工事について、支障なしと判断した。



写真 3 完掘状態 (3 トレンチ)



第5図 トレンチ配置図

【出土遺物】

今回の調査で、出土した遺物は少ない。次に、採拓できたものを取り上げた。

1が土師器、2～9は、縄文土器の土器片である。

1は、土師器甕の底部破片。2は深鉢の口縁破片で、磨消縄文が見られる。3は、深鉢の底部破片。4～8は深鉢の胴部破片である。9は、深鉢の口縁部握手の破片である。

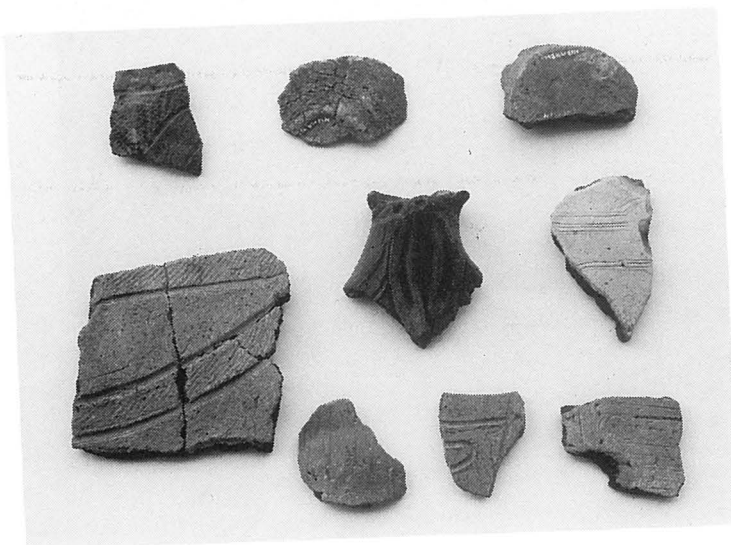
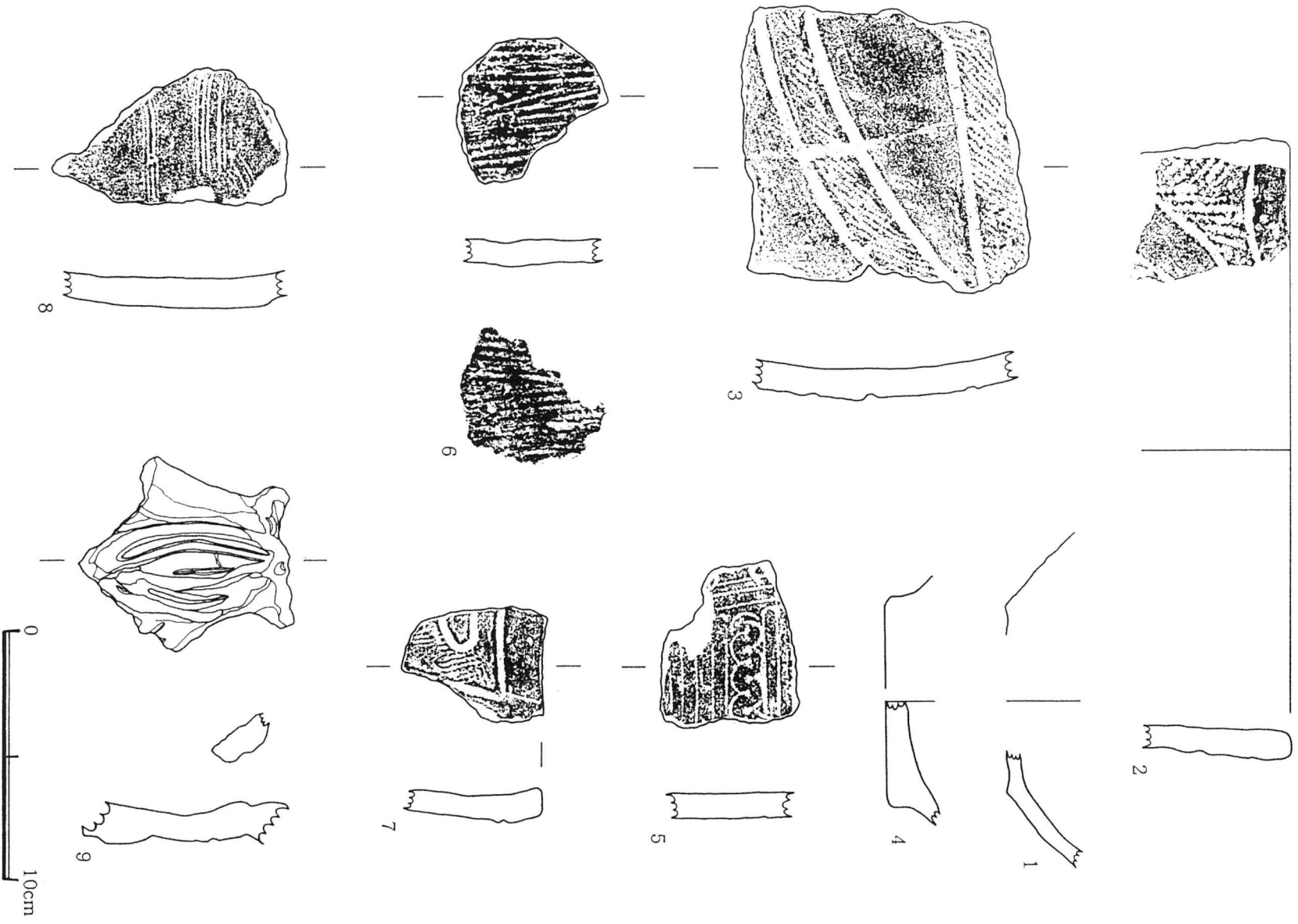


写真4 出土遺物



第6图 出土遗物实测图

2 花山東遺跡

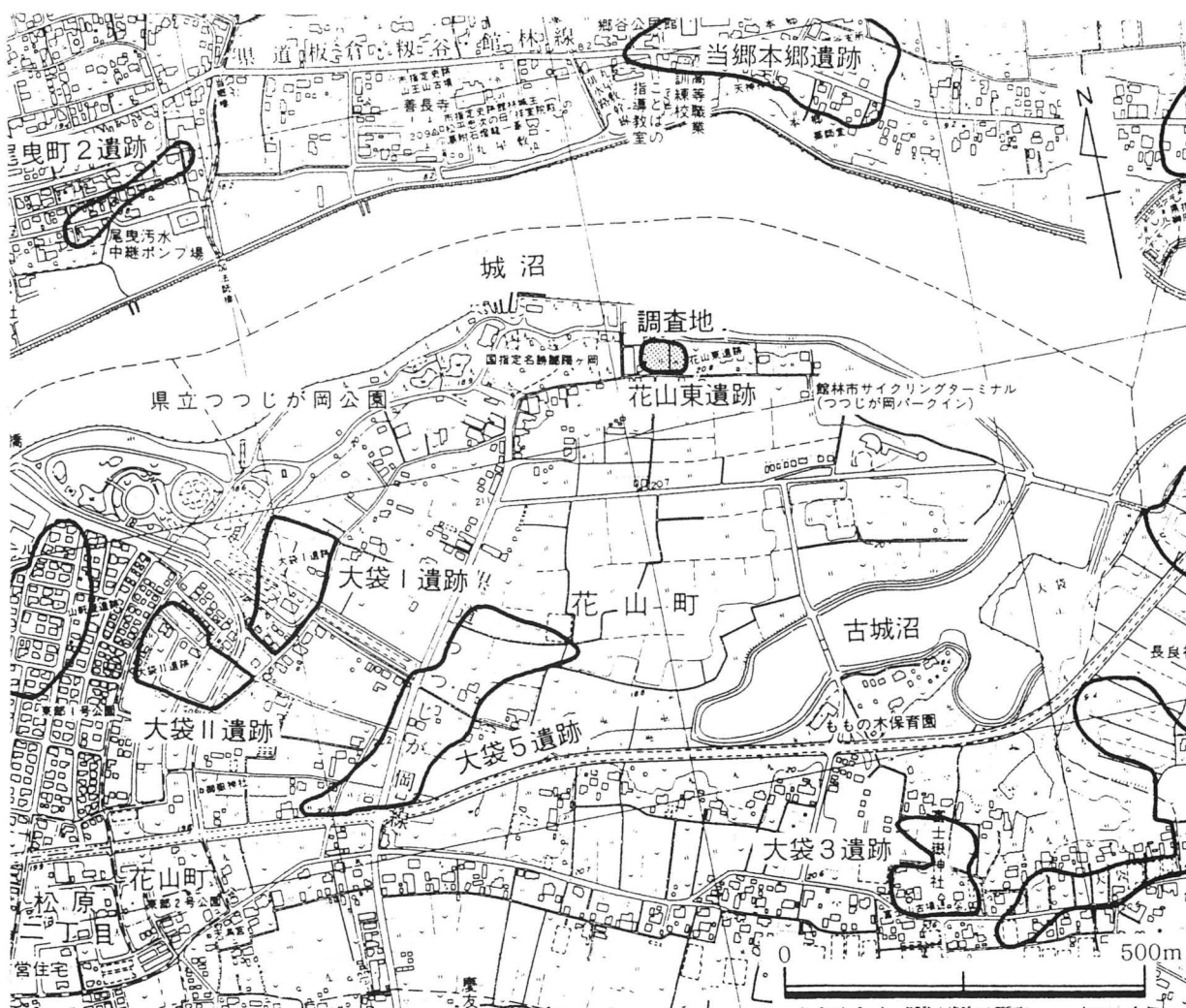
【立地と環境】

花山東遺跡は、館林市の東部、市役所のほぼ西方約 1.5km、群馬県立つつじが岡公園の東方約 200m に位置する縄文時代の遺跡である。

本遺跡は、城沼と古城沼の二つの沼の周辺台地上に分布する遺跡の一つである。城沼は、市内に点在する池沼の中でも大きなものの一つで、本市市街地の東側に東西帯状に細長く延びている。邑楽・館林台地を開析する谷の中でも、本市中央部を東流する鶴生田川から、この城沼へかけての谷は市内最大のものである。

本遺跡は城沼を北に見下ろす邑楽・館林台地上に位置しており、標高は約 20m である。

次に、周辺の遺跡をあげると、『館林市の遺跡』（昭和 63 年）作成に伴う遺跡分布調査において、過去に調査を実施した縄文時代を中心とする大袋 I 遺跡や、昨年度調査を行った大袋 5 遺跡などが見られるほか、古墳時代を中心とした大袋 4 遺跡、また対岸の城沼北側では、市指定史跡山王山古墳を含む古墳時代以降の遺跡が所在している。



第7図 周辺の遺跡

【調査の概要】

本地点の発掘調査は、花山土地区画整理事業における造成工事に伴う事前調査として実施した。

館林市教育委員会では、平成11年の花山土地区画整理事業区域の計画決定及び組合設立後、区域内に所在する花山東遺跡の取扱いについて、館林市都市開発部区画整理課を通し組合側と調整を進めた上、当該遺跡に既往の発掘調査例がないことを踏まえ、造成工事に先立ち、遺跡の保存状態、遺跡の範囲、遺構等の有無などの確認を目的とした調査を実施した。

調査は、該当する区域内に南北6本のトレンチを設定し、地下の状況確認を行った。

調査地の現地地形は、南西側から城沼に向かい北東方向に傾斜しており、表土で30cm程度の高低差が見られた。また旧地形では、ローム層で70cm程度の高低差があることが確認された。

1トレンチ南側では、攪乱土の中から焼土が確認されたため、サブトレンチを設定し調査したところ、住居址1軒（古墳時代）が確認された。

その他各トレンチからは、自然層を削る掘り込みがいくつか見られたことから、覆土を除去したが、まとまった遺物や焼土を伴ったものはなかった。

今回の調査では、1トレンチ南側で古墳時代の住居址1軒と各トレンチから少量の遺物を確認したが、造成工事では現表土に50cm～70cmの盛土を行うことから、本工事に付いては支障はないと判断した。



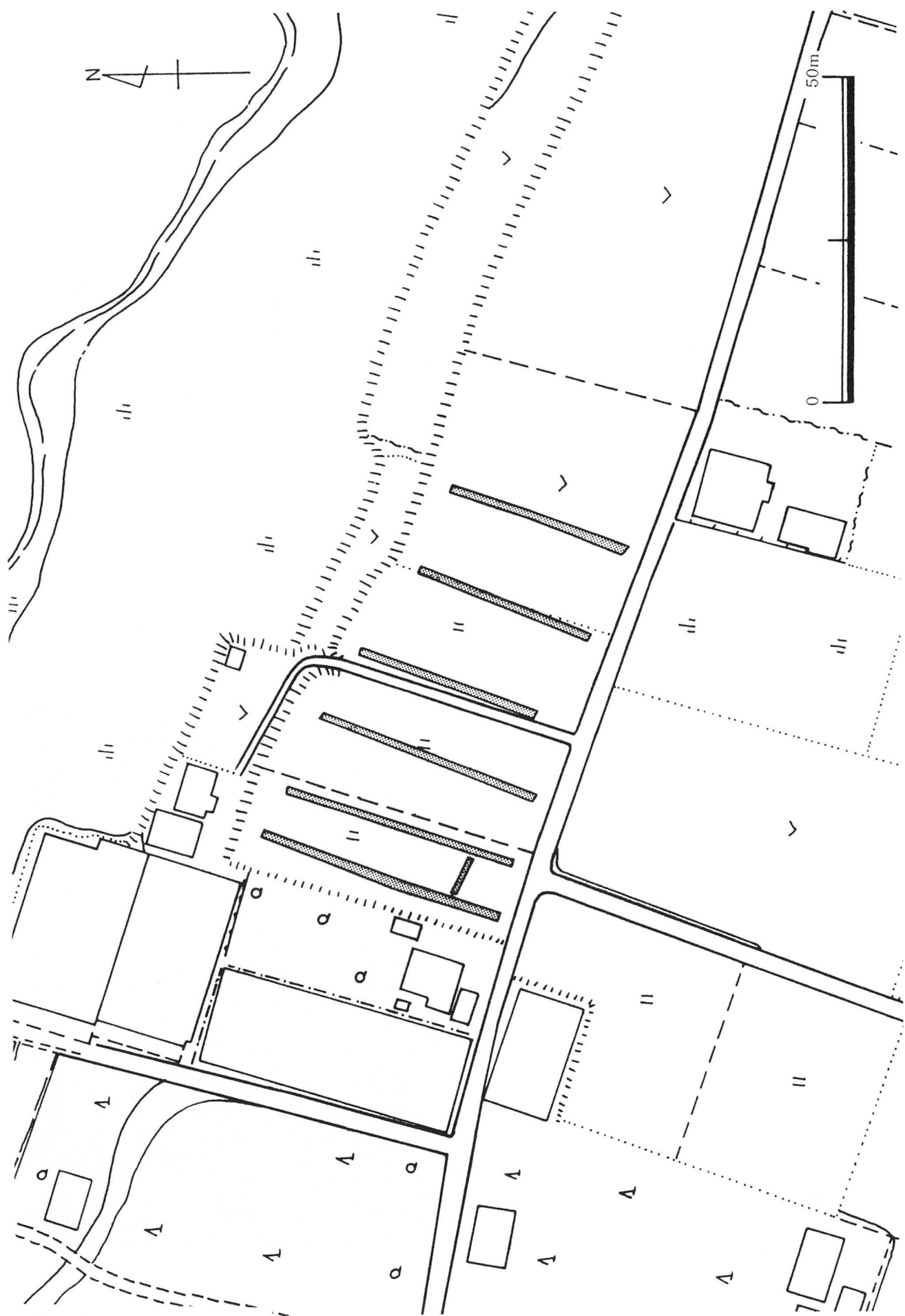
写真5 調査前景観



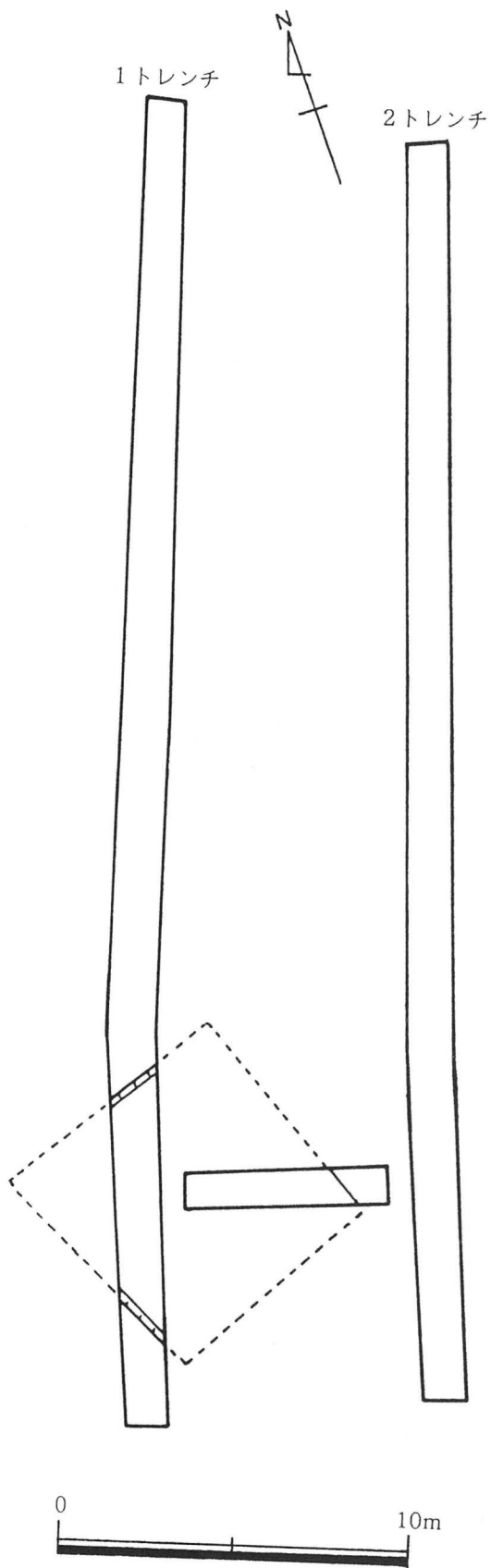
写真6 調査風景（1）



写真7 調査風景（2）



第8図 トレンチ配置図



第9図 1トレンチ平面図(1トレンチ・サブトレンチ)



写真8 完掘状態 (1トレンチ)

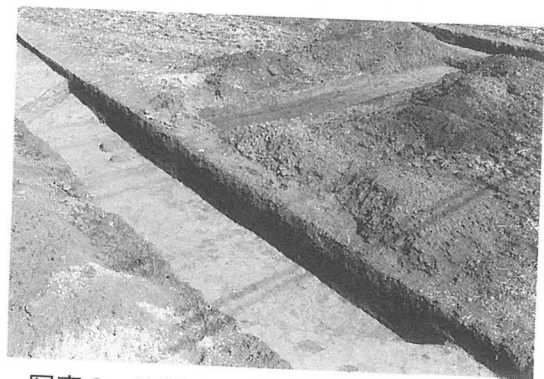


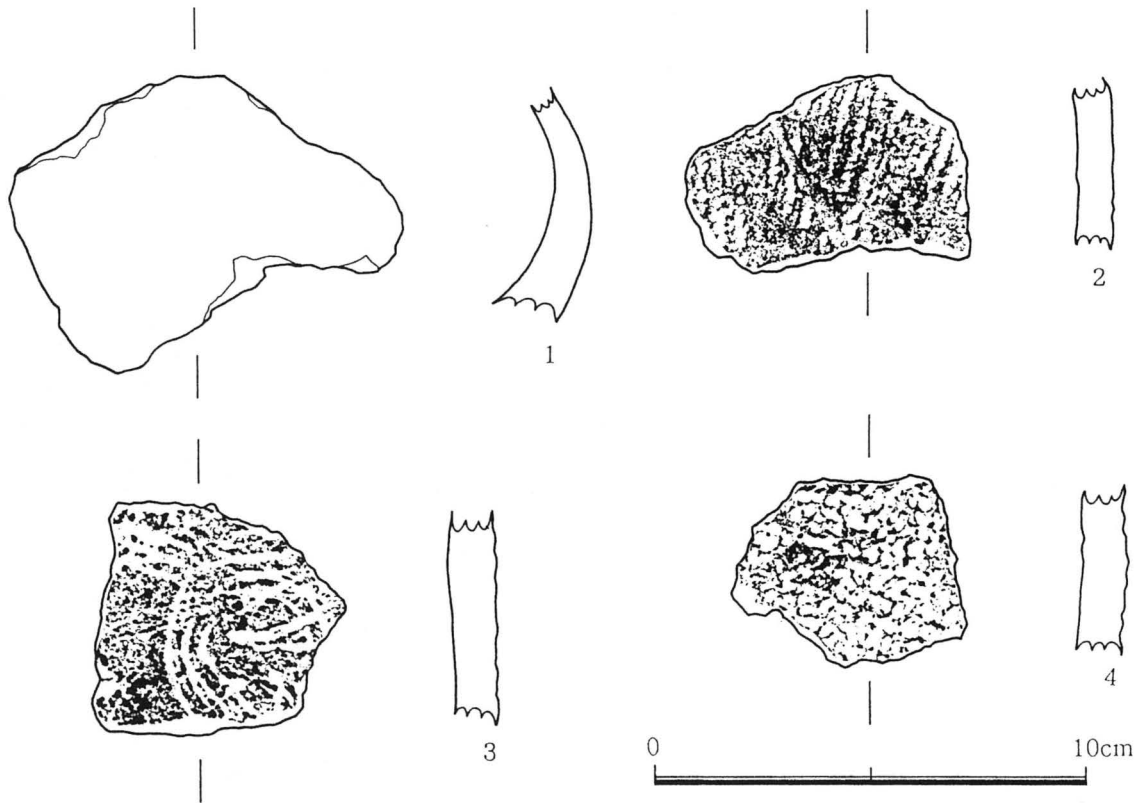
写真9 遺構確認状況

【出土遺物】

今回の調査では、出土した遺物は少ない。次に採拓できたものを取上げた。

1は土師器、深鉢の胴部下部分の破片で、表面にへラケズリが見られる。

2～4は縄文土器で、深鉢の胴部破片であり、縄文が施されている。



第10図 出土遺物実測図



写真10 出土遺物

3 宮内遺跡

【立地と環境】

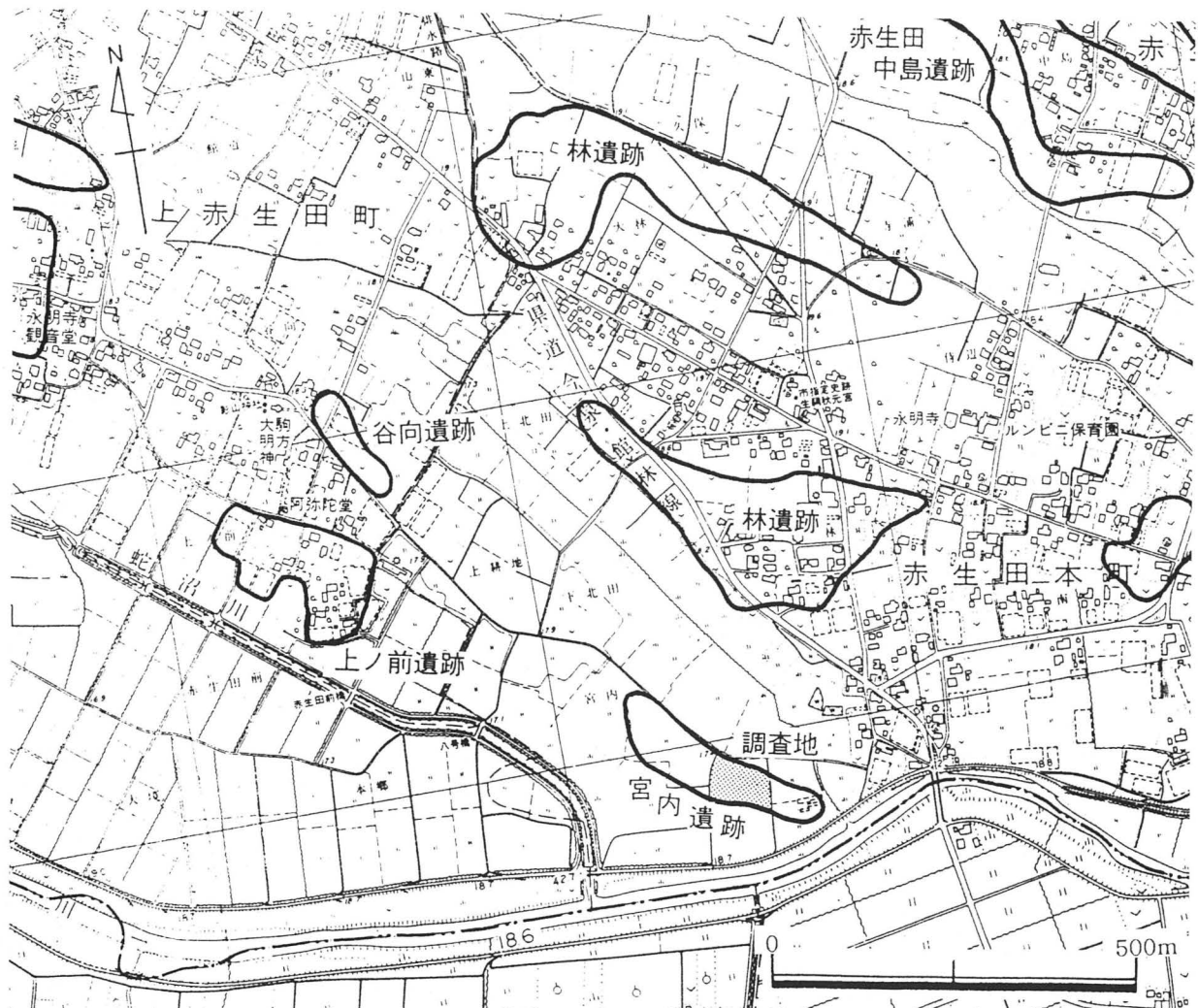
宮内遺跡は、館林市の南部、館林市役所の南方約3km、東北自動車道路館林ICの東方約1.5kmに位置する縄文時代から平安時代にかけての遺跡である。

昨年度、調査を行った区域西側A区では、遺構等は確認されなかったが、縄文土器や土師器などが多数検出されていることから、縄文時代を中心とした包蔵地であることが考えられる。

本遺跡は、邑楽・館林台地の南部、谷田川から西北方向へ延びる開析谷（現況は現上赤生田1号幹線排水路及び周辺の湿地帯）側に望む低台地上にあり、南方に谷田川が東流する邑楽郡明和町との境に位置している。標高は約17mである。

本遺跡は、上赤生田1号幹線排水路と蛇沼を形成する低地（現在は蛇沼川として整備されている）に挟まれた舌状台地の先端部に位置し、南側は谷田川の現河道になっている。

次に、周辺の遺跡をあげると、『館林市の遺跡』（昭和63年）作成に伴う遺跡分布調査において、上ノ前遺跡や谷向遺跡、昨年度調査を行った林遺跡など、縄文時代から平安時代の土器片が散布する包蔵地が所在している。



第11図 周辺の遺跡

【調査と概要】

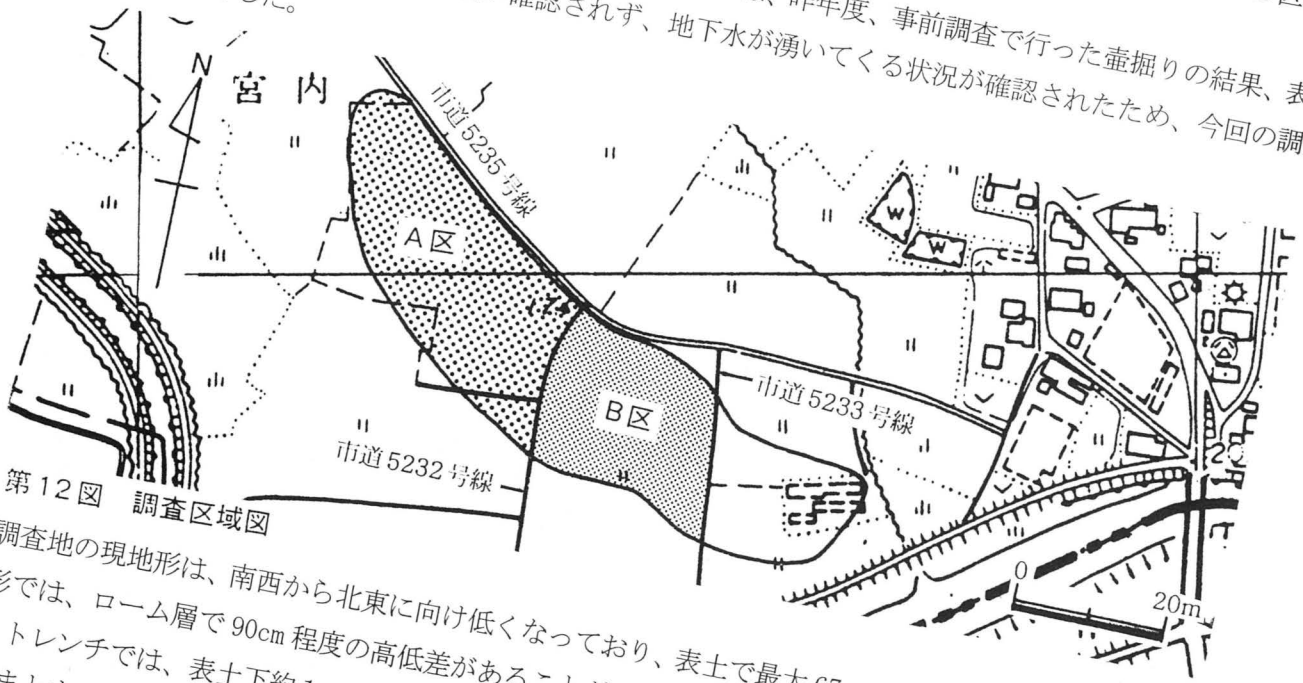
本地点の発掘調査は、谷田川北部土地改良事業における、非農用地を事業区域とする谷田川北部産業団地（仮称）建設に伴う事前調査として昨年度より実施した。総面積は82.6haに及ぶ。

館林市教育委員会は、区域内に所在する林、宮内、谷向、咄戸沼、神明前、上ノ前遺跡の取り扱いについて、館林市経済部農村整備課を通じ谷田川北部土地改良区と協議を進め、平成12年度に林、宮内遺跡（A区）の調査、今年度は、引続き宮内遺跡（B区）の試掘調査を実施した。

また谷向、咄戸沼、神明前、上ノ前遺跡については、平成14年度以降に実施する予定である。調査区域は、昨年度実施したA区との境である市道5232号線より東、市道5233号線との間をB区として、東西の6本のトレンチを設定し、地下の状況確認を行った。なお、市道5233号線より東の遺跡推定区域については、昨年度、事前調査で行った壺掘りの結果、表土下2mの掘削によってもローム層が確認されず、地下水が湧いてくる状況が確認されたため、今回の調査区域から除外した。



写真11 調査前景観



第12図 調査区域図

調査地の現地形は、南西から北東に向け低くなっており、表土で最大67cmの高低差が見られた。また旧地形では、ローム層で90cm程度の高低差があることが確認された。

1トレンチでは、表土下約1mから水分を含んだローム層が確認された。溝状の掘り込みがあったものの、まとまった遺物等は確認されなかった。2トレンチでは、西側から東側にかけてトレンチ中央部まで、水分を含んだローム層が確認されたが、東側では地下水により確認することができなかった。ローム層の深さは、西側で表土下約1m、中央部で約1.5mであった。調査期間中に雨が降ったため、地下水の上昇により、調査終了まで水が引かない状態であった。

3トレンチは、調査区域の中で最も低い水田部分であり、他のトレンチとでは表土の高低差が60cm程度であった。ローム層は、1・2トレンチ同様水分を含んでいるほか、砂質であり表土下70cm程度で確認さ

れた。

4トレンチでは、無数の穴状の掘り込みが確認されたが、遺物を伴うものではなかった。遺物は、トレンチ西側の耕作土下攪乱層から、いくつか出土したのみであった。5トレンチでは、中央部に崖状の落ち込みが確認されたほか、東側より南北方向への溝状の掘り込みが確認されたが、延長部である4トレンチからは確認されなかった。本遺跡の中では、出土遺物が比較的多かった。



写真12 調査風景

6トレンチでは、中央部から西側へ階段状の掘り込みが確認されたが、まとまった遺物を伴うものではなかった。ローム層は、表土下約1mで確認された。

今回の調査区の旧地形は、北東部分が湿地帯の低地であり、南東部分が台地と考えられるが、土地所有者への聞き取り調査等で、過去において人工的な土地の平坦化や高台からの採土等が行われている状況が確認された。出土遺物も攪乱層からの出土が多かった。

また、5・6トレンチで見られる掘り込みについては、中世以降のもので特筆するものではないと判断した。

今後計画されている谷田川北部産業団地（仮称）建設に対しては、盛土による造成工事である事、特筆する住居址等の遺構が確認されなかった事から、昨年度のA区の調査結果を踏まえ、本事業については支障なしと判断した。

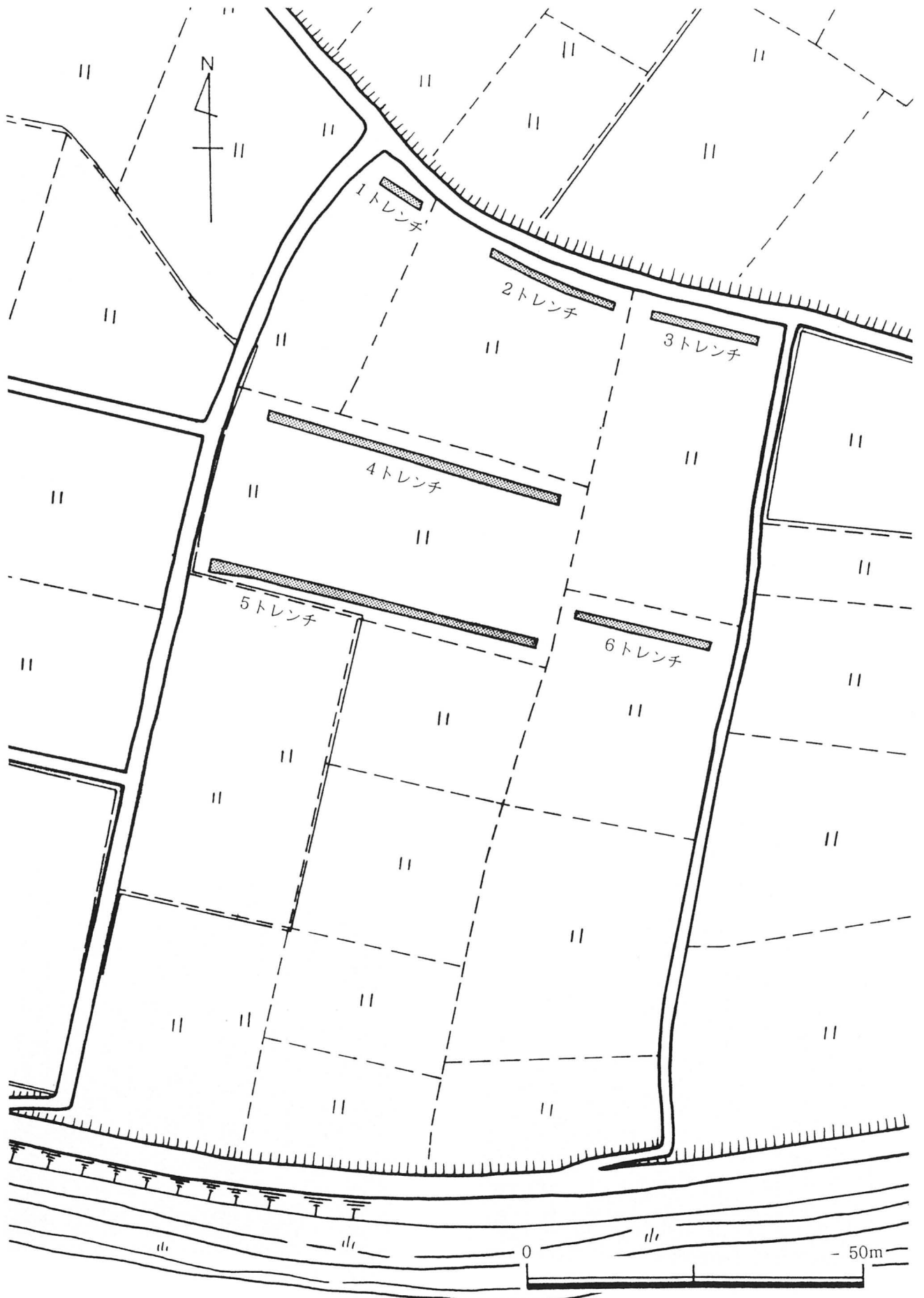
本調査終了の際、トレンチ埋め戻しについては、終了後の水田稲作を予定しているため、土地所有者との協議により、二次にわたる重機による転圧・埋め戻し作業を行った。



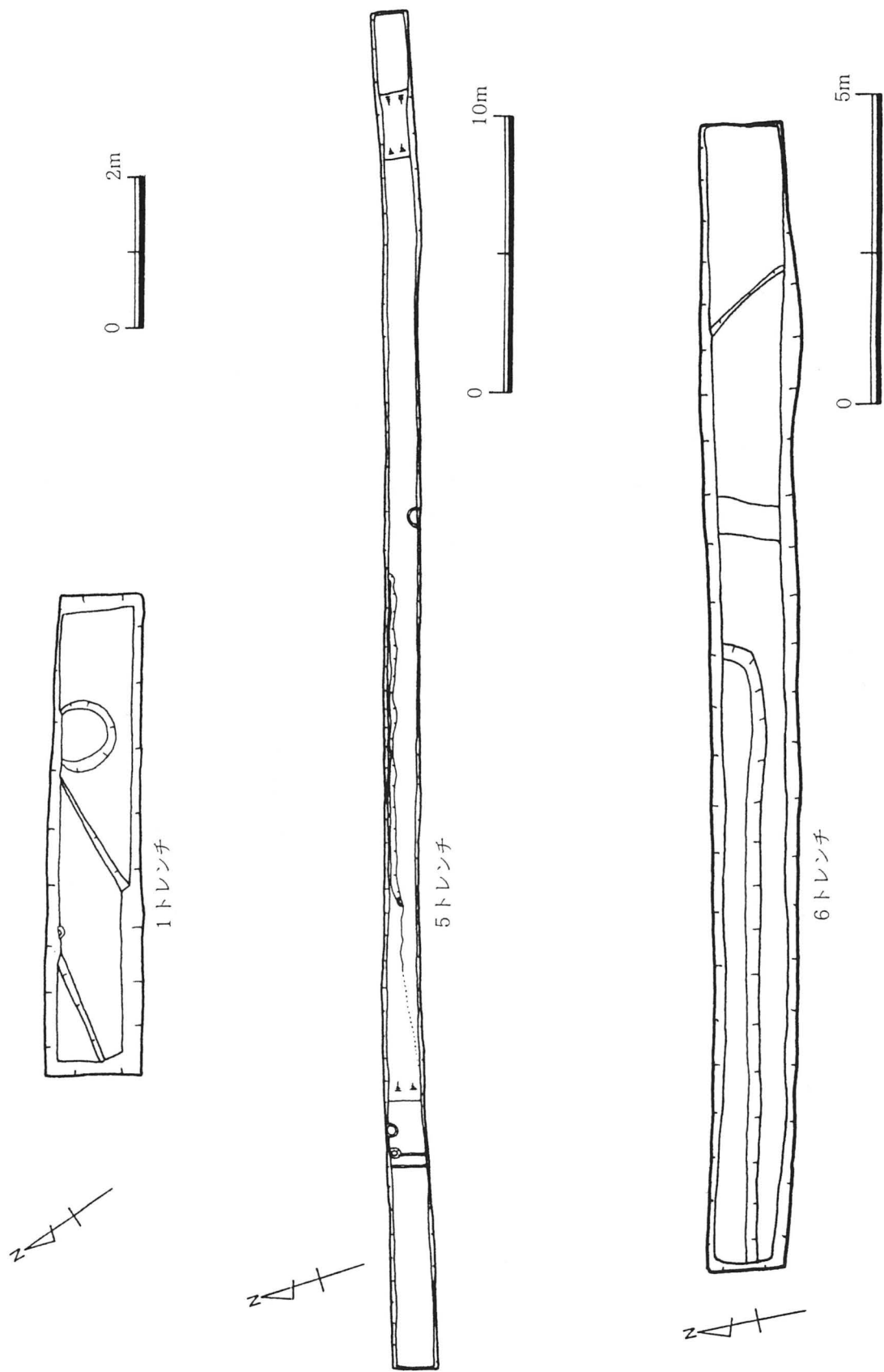
写真13 完掘状態（5トレンチ）



写真14 埋め戻し（一次）



第13図 トレンチ配置図



第14図 1・5・6トレンチ平面図

【出土遺物】

今回の調査で、出土した遺物は数十点である。次に採拓できたものを取上げた。

1～3は縄文土器の土器片である。1は深鉢の底部破片である。2はくし状工具、3は竹管による沈線が見られる。

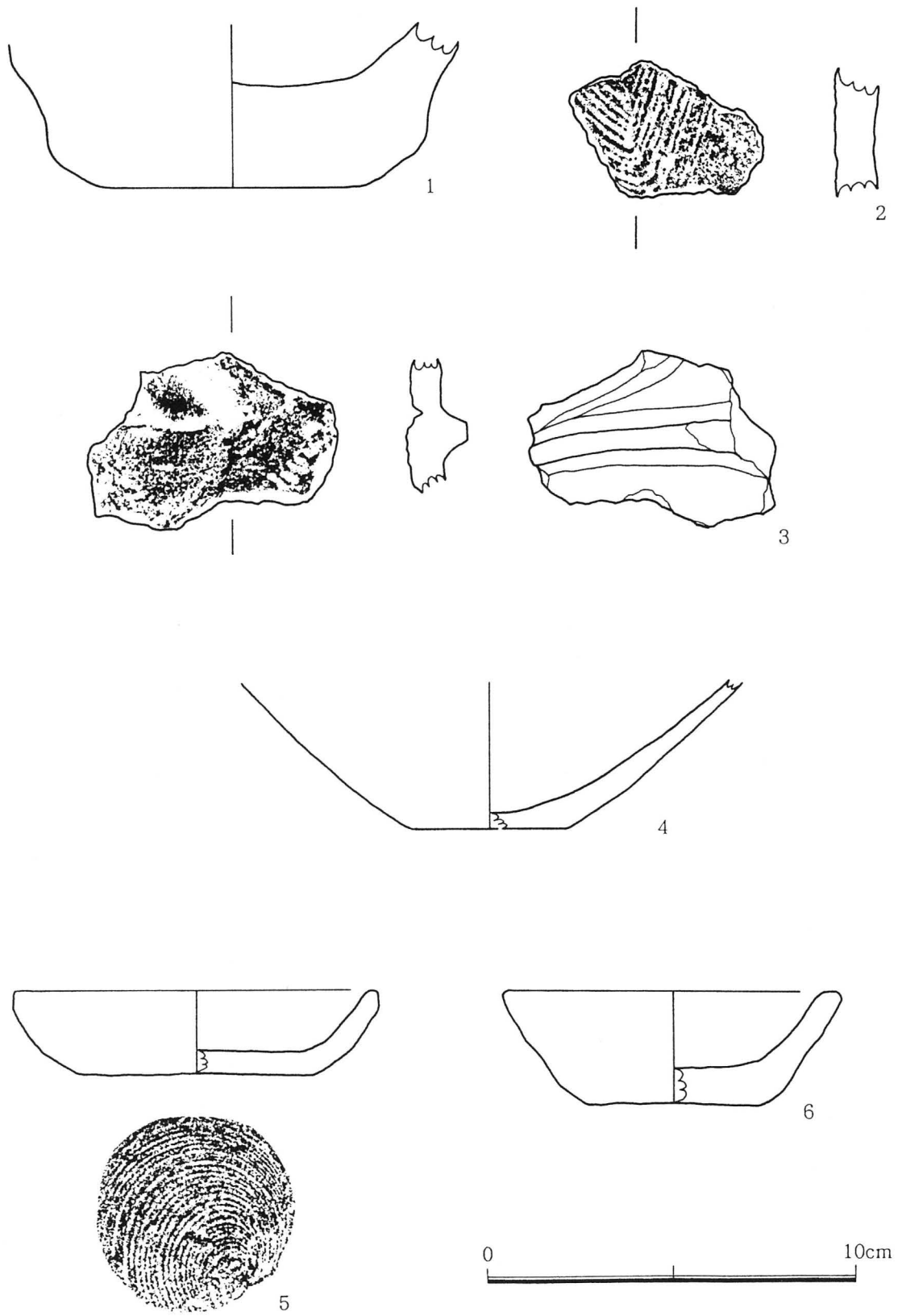
4は土師器の底部破片である。5、6はカワラケで、5は4分の3固形であり、底部に糸切り痕が見られる。7は軟質陶器の胴部破片。

8、9は須恵器の胴部破片。10は陶器の口縁部分の破片。11は石器で、黒曜石のフレイクである。

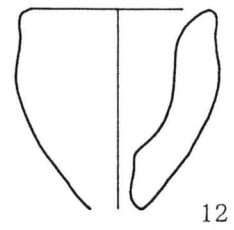
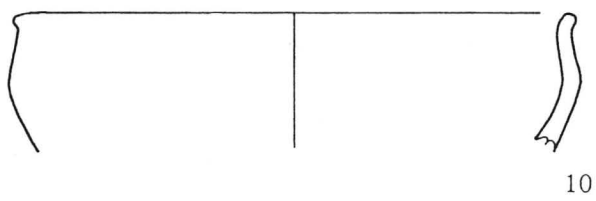
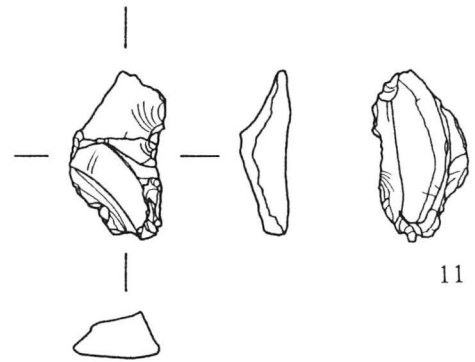
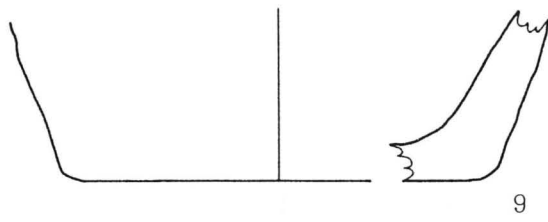
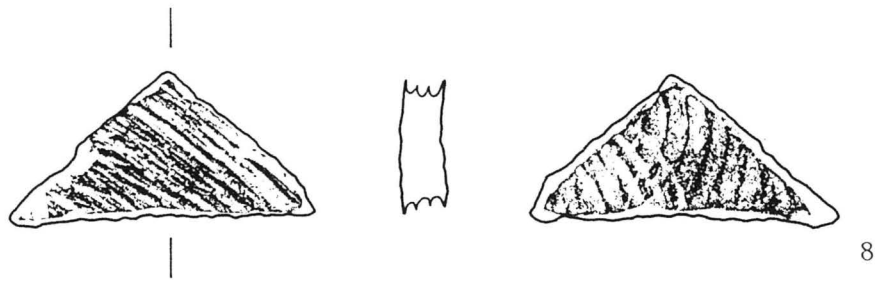
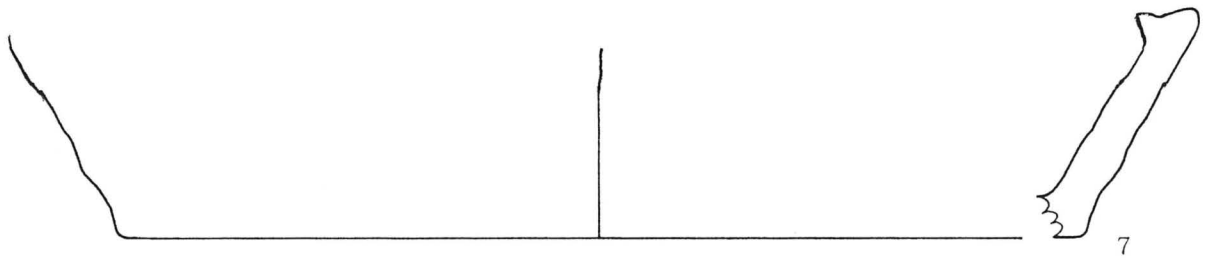
12は、甌の2分の1固体、ミニチュア土器である。



写真15 出土遺物



第 15 図 出土遺物実測図 (1)



第16図 出土遺物実測図(2)

参 考 文 献

- | | |
|----------|-------------------------------|
| 館林市教育委員会 | 『館林市埋蔵文化財発掘調査報告書』第1集～第36集 |
| 館林市教育委員会 | 『茂林寺沼及び低地湿原調査報告書』第2集(1986) |
| 館 林 市 | 『館林市誌・歴史篇』(1969) |
| 館 林 市 | 『館林市誌・自然篇』(1966) |
| 館林市立図書館 | 『館林双書』第1巻～第28巻 |
| 群 馬 県 | 『群馬県史資料編1 原始古代1 旧石器・縄文』(1988) |
| 群 馬 県 | 『群馬県史資料編2 原始古代2 弥生・土師』(1990) |
| 群馬県林務部 | 『群馬県の貴重な自然・地形・地質編』(1999) |
| 群馬県教育委員会 | 『群馬県遺跡台帳・東毛編』(1971) |

抄 録

ふりがな	たてばやししないいせきはくつちょうさほうこくしょ							
書名	館林市内遺跡発掘調査報告書							
副書名	—————	巻次	—————					
シリーズ名	館林市埋蔵文化財発掘調査報告書	シリーズ番号	第37集					
編集者名	高橋一哲	編集機関	館林市教育委員会					
所在地	〒374-0018 群馬県館林市城町1-1							
発行年月日	西暦2002年3月31日							
ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
		市町村	遺跡番号					
はち 八	がた 方 おかのちょうあざはちがた 岡野町字八方	1207	18	—	—	2001 2001	737.00	道路
はな 花	やま 山 ひがし 東 はなやまちょうあざおおぐろ 花山町字大袋	1207	67	—	—	2001 2001	2,700.00	宅地造成
みや 宮	うち 内 あこうだちょうあざみやうち 赤生田町字宮内	1207	113	—	—	2002 2002	6,475.00	産業団地
遺跡名	種別	時代		主な遺構		主な遺物	特記事項	
八 方	集落跡	古墳～平安		—————		土器片		
花 山 東	包蔵地	縄文		—————		土器片		
宮 内	包蔵地	縄文・古墳・平安		—————		土器片		

館林市埋蔵文化財発掘調査報告書 第37集

館林市内遺跡発掘調査報告書

発行 館林市教育委員会
印刷所 オーラ印刷株式会社
発行年月日 平成14年3月31日



文化財愛護シンボルマーク
故郷の文化と歴史をみなおそう